

ヤン・ファールブル

わたしは血

終わることのないファールブルの謎解きゲーム

ダンスやアートなど既成の枠に捉われず、自在な表現活動をするヤン・ファールブルには、多くのクリエイターやアーティストたちも注目している。

自身も、ファッションモデル、ダンサー、デザイナーと多面的な活動をしている山口小夜子さんもそんな一人。

ヤン・ファールブルが日本で初めて公演して以来、美術作品や舞台を観てきたという山口さんが「わたしは血」に込められたファールブルの真実に迫る。文・山口小夜子

J E S U I S S A N G

ヤン・ファールブルの「劇的狂気の力」が東京で初めて上演されたのは、確かバブル期真っ只中の86年だったと思う。残酷なまでに延々と繰り返される反復運動に怒って帰る観客が居たほど、衝撃と戸惑いを持って受け止められた作品だった。以来、わたしはヤン・ファールブルのシアターワークやドローイング、インスタレーション等の美術作品を折りに触れ観るチャンスがあり、いつの間にかファールブル作品の謎解きゲームの迷宮にひとり迷い込んで抜け出せないでいる。ビックのボールペンで執拗に塗り潰されたインクの青い霧が立ち込める空間、降り注ぐガラスの欠けら、天空から落下する夥しい数の白い皿が床の上で砕け真っ白な破片がめまいのように飛び散る瞬間、甲虫の羽にびっしり覆いつくされ

緑色に輝くブリュッセル王宮の広間の天井とシャンデリアの煌めき、天井に吊られたグランドピアノ、瓶から滴り落ち続けるオリーブオイルは、永遠の時を刻むように舞台の床を濡らして行く。そしてそれらを全身で受け止め同化する人体(達)は、戦士のように凛々しく崇高なまでに堂々と観客の前に立ち続ける。ファールブルの衝撃的なシアターワークは何時も事件であり、その都度、影の如く論争が付きまとう。口論や論争は、ファールブルが人間の本质を探り出そうとするあまり、舞台上のセオリーにおいてはタブーに近い領域にまであえて踏み込んで行くからなのだと、わたしは思う。既成の演劇やダンスやオペラというカテゴリーから逸脱するファールブルの独自の

舞台創作の不思議は、出演者をどんなにトランス状態に追い込んだとしてもけして気品を失わせず、詩的世界の美を冷静に保ったまま、中世ヨーロッパの伝統的な在り方をロックを伴った現代から未来へ向う文脈の中に息づかせて、人間の奥に潜む本能を赤裸々に暴き出し、まるで不協和音の楔を打ち込む儀式のように観客に問いかけ、リアリティーと想像力の淵を行き来させる所だと思ふ。中世の暗黒時代から現在、未来においても人間の本质は何も変わっていない、と言いきるテキストがテーマの『わたしは血』というこの作品もまさに心に突き刺さる不協和音の楔の儀式であり、論争の対象になる事件であると思ふ。シンプルな舞台上には手術台が実験台にも思える金属のテーブルが幾つもあり、

演者達は恰も生贄に選ばれるが如くテーブルの上で、身体という檻の中に詰まっている闇を、客席へと吐き出す。願望、欲望、病、苦み、痛み、情念、錯乱、固定観念、生と死。ダンサー達の限界へと向うステップや俳優達がさらけ出す汗、詩を読む声が次第に血の叫び声になり、血の汗となり、血のステップが踏まれる。汚れ一つ無いコスチュームや身体がだんだん血に染まり血にまみれてゆく。血の言葉と血の身振り、血にまつわるタブーが、愚かさや可笑しさを交えて、バベルの塔の下で行われた宴ながら、肉食人種と草食人種の違いこそあれ不変的な人間の生理と本能をさらけ出しテーブルの舞台の上で繰り広げられる。それはファールブルが演者の身体を通して観察してきた抽象的なイメージやフォルムが標本のように集積されたページを観ているようでもある。……と書いていたら、ふっと、気がついた。

もしかしたら一番観察されているのは様々な人間の生態を集めた標本を目の前に突きつけられた観客なのかも知れないということ。きっとファールブルは、この作品を観たあなた方は何を想像し、何を感じ、どのような解答を持っているのかと、その想像力を問われているのかもしれない。わたしのファールブル謎解きゲームは、まだまだ最終地点に辿りつかなさそうである……。

ヤン・ファールブル 演出・振付・舞台美術・テキスト

『わたしは血 JE SUIS SANG』

人間の本质は、中世以来、変わっていない! 「血」をテーマに描き出される人間の本性。ヤン・ファールブルが、美術家としての才能を遺憾なく発揮した舞台は、どのシーンをとっても絵画のように美しい。アヴィニョン・フェスティバルを震撼させた衝撃作品だ。

【日時】2月16日(金) 開演 19:30
17日(土) 開演 16:00
18日(日) 開演 16:00

【会場】
彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
【演目】『わたしは血 JE SUIS SANG』—中世狂歌集—
【演出・振付・舞台美術・テキスト】ヤン・ファールブル
【出演】俳優、ダンサー、ミュージシャン 23名
【チケット(税込)】発売中
一般S席7,000円 A席5,000円 学生A席3,000円
メンバーズS席6,300円 A席4,500円

talk・talk・talk 第3回 山口小夜子 × 蜷川幸雄

「着る」ことには空気や音楽、ある時は建物まですべてが含まれている。

昨年10月に彩の国さいたま芸術劇場で行われた、山口小夜子さんと蜷川幸雄との対談「talk talk talk」。以前から親交のある二人の間で交わされた刺激的な会話から一部を抜粋してお届けしよう。



蜷川(以下N) 山口小夜子さんには、十数年前に初めてファッションショーの演出をした時に出て頂きました。それは本当に素敵で、それまでのファッションショーという概念が崩れて、ダンサーのように自在に、着ていた衣装を脱いで引きずったり、羽織ったり、一枚の衣装を多彩に魅せてくださいました。世界的なトップモデルとして活躍と同時に、パフォーマーであり、ダンサー、デザイナー等多方面でそれぞれのジャンルを飛び越えて活躍していらっしゃいますが、今ご自分を紹介するとしたらどう言いますか。

山口(以下Y) 私のテーマは「着る」ということです。衣服を着ることもそうですが、ここにある空気も衣服の中に含んでいますし、布の中にも空気を含んでいるので、それらも同時にまわっていると考えています。だから、この建物や、私たちの身体自身、身体も心が着ているのだと思っています。映像を使って最近ではパフォーマンスをしています、映像を着る、音楽を着る、照明も着ているという観点に立っています。私は着るというテーマで考えると、物事が解明できるのです。

N ダンサーの方とお仕事をなさいますが、そういう時はどう考えるのですか。

Y 私は勅使川原三郎さんの作品に出演させていただき、10年ほど海外ツアーをご一緒させていただきましたし、山海塾の天児牛大さんとは長くお仕事もさせて頂いていますが、そこで感じるのは「身体と心の関係」、「皮膚」とか「関節」とか、自分たちの中にある細かな部分に意識をつなげてみようということがまずは基本にあると思います。

N 小夜子さんはモデルから出発し、演劇やダンスなど身体を使った表現者として何かをやっていくという、そういう越境する楽しみが小夜子さんの中にあるような気がします。

Y ファッションの仕事をはじめた年と同じ年に東由多加さん、寺山修司さんとお仕事をしています。モデルの仕事は偶然といえますか、流れるようにそうなってしまうだけで、舞台の表現にはとても興味がありましたので、だから同時だったのです。

N 外国でデザイナーの方の仕事をたくさんやっと思いますが、その経験はもちろん大変刺激的だと思いますがどうですか。

Y 演劇もそうだと思いますが、ファッションは一番新しい、未来を見つめる音楽、色、形、美術的な要素、建物、そういうものが混然一体となったものがデザインされた服に集約されていると思います。そこに私もかかわっていく中で、常に新しい音、音楽を知っていなくてはいけないため、いま街中で何が流行っているかも分かっていないと歩けなかつたりします。最近、アートの世界では服を題材にしたアーティストが出てきています。服の形で表現し、布で表現するアートを今、私は興味深く見えています。



やまぐちさよこ。ファッションモデルとして、パリ及びニューヨークコレクションで活躍。同時に映画、演劇、ダンスコンテンポラリーなど国内外の数々のクリエイションに参加。出演作品の衣裳スタイリングや自身のブランドのプロデュース、またオペラ、シェイクスピア劇の意匠を担当。最近では映像作家と音楽のミックスを組み入れたコラボレーションなど様々なアーティストとジャンルの枠を超えた活動をしている。